

中国地質大学の設立

岸本文男（地質相談所）

FUMIO KISHIMOTO



紹介がくれたが 世界の地質科学教育上の一つのトピックスと見 将来 我が国の地質科学界と係わり合いが生れるに違いないと考え 中国地質大学の設立とその趣旨などを中国側の報道に依ってお知らせする。筆者が中国地質大学の設立を知ったのは 1987年 11月 11日 付<中国地質報>の陳昕署名の記事からである。この記事は 次の通りであった。

中国地質大学—認可創立

「国家教育委員会は中国地質大学の設立を認可し ここに正式に同大学が設立されることとなった。この大学は 高水準の地質科学技術者を養成する新しいタイプの総合大学である。

この中国地質大学の前身は北京地質学院で 1952年に周恩来総理（当時）の肝入りで創建された いわゆる「文化大革命」前に全国64ヶ所にあった高等専門学校の一つである。10年に及ぶ「文化大革命」の動乱の間 同学院は言い尽せない災難を被り 大部分の教職員と工務従事者は南の武漢に移り 学院は名を武漢地質学院と改めた。そして 1978年になって国务院の承認を得て北京地質学院の社に武漢地質学院北京研究生部が設立され 1986年には再び国务院の承認のもとにその名称を武漢地

質学院北京研究生院に変えた。

35年このかた 北京地質学院は2万名もの地質科学の人材を養成し 中国における地質事業の発展に重要な貢献をしてきた。全国に広がっている地質調査・研究陣の中のどの班にも 必ず北京地質学院の卒業生がいてと言ってよい。不完全ではあるが 統計によると 地質鉱産部とその管下機関では すでに100名を越える北京地質学院の卒業生が課長以上の責任ある部署に着いている。

1978年に北京で勉強ができるようになってから 北京地質学院は112名のドクターコースの研究生 1,077名のマスターコースの研究生を受け入れた。すでにドクターの学位を授けられた卒業生が8名 マスターの学位を授けられた卒業生が538名 留学生および専修生として外国に招かれ あるいは派遣された者が55名となっている。同学院は さらに 国家科学委員会の承認のもとに ドクターコース終了後の流動研究員のための施設を作り すでに4名のドクターコース終了後の流動研究員を受け入れている。

新たに設立された中国地質大学は もとの武漢地質学院 武漢地質学院北京研究生院 武漢地質科学技術管理幹部学院 北京地質管理幹部学院を包括するものである。これらの教育機関は それぞれ相互には独立した

教育運営を行うが、それでも中国地質大学の切り離せない構成部分である。中国地質大学の教育・勉学の本旨は、社会主義的教育・勉学の方向を堅持し、「顔を近代化に向け、顔を世界に向け、顔を未来に向ける」ことを堅持し、一步一步地質科学分野の高水準の人材と新たなタイプの地質事業管理の高水準の人材を養成し、理学、工学、文学、管理学の専門分野にまたがる総合的・研究の大学として本領を発揮することにある。中国地質大学が北京・武漢両地域を結んで教育を行い、人材を求めることができるという有利さを利用して、教育を主体に教育と科学研究のセンターとなり、すでに人材を生んできたし、今後も成果を上げるだろう。同時に、国際的学術交流を強め、共同研究を深めて、地質科学の国際交流の重要な窓口になるはずである。

1987年の11月7日、北京地質教育センターと武漢地質学院はそれぞれ盛大な集会を開き、北京地質学院の創立35周年を記念し、中国地質大学の設立を祝った。国家教育委員会、国家計委委員会、国家科学委員会、地質鉱産部、中国科学院、国家海洋局、全国体育協会、北京市高等教育局、北京市成人教育局、成都地質学院、河北地質学院、西安地質学院、中国地質科学院の指導者たちと21の省・特別市・自治区の1,500名の同窓生が北京における祝賀に参加した。

中央書記処の書記候補、中央弁公庁主任の温家宝は電報を寄せ、35周年に祝意を表した。彼はこう述べている。「我、公務のため祝賀に参加できず、とくに母校全教職員・労働者に心からなる挨拶を送り、後日機会を得て諸先生と同窓の諸氏に会えることを請い願う」。

地質鉱産部の朱訓部長、張宏仁副部長および地質学界の先輩である黄汲清、程裕祺、袁見齊、池際尚の各教授元の北京地質学院副院長の肖英の各氏も、この祝賀会に参加した。

この報道で新大学の歴史や設立への経過、設立の主旨の大意、祝賀会の模様を推知することはできよう。その設立の趣旨や今後の教育方針については、さらに記者会見で語られている。

記者会見—中国地質大学の設立について

「11月7日、地質鉱産部の朱訓部長は、新華社、中央人民放送局、光明日報、北京日報、科学技術日報、中国地質報など10数社の首都の報道機関の20名ほどの記者に、中国地質大学を設立する状況について紹介し、記者の質問に答えた。

質問：中国地質大学を設立しなくてはならない理由は何？

答え：近代地質科学の研究領域は時を迫って、ますます広くなり、四つの近代化の地質調査・研究に対する要求もますます多く、さらに高く、その実現が迫られ、地質事業の実施領域は絶えず拡大され、探査の難度も大きくなり続けています。ですから、そのような課題の解決には、新しい技術が必要となっていますし、ますます多方面にわたる知識が求められ、さらに多くの課題の増大に見合った、質の高い地質科学分野の人材とその管理分野の人材が要求されるようになりました。そこで、国家教育委員会は、もとの武漢地質学院、武漢地質科学技術管理幹部学院、北京地質管理幹部学院を連合させ、中国地質大学を設立することを承認したのです。

質問：中国地質大学の設立には、どのような利点があるか？

答え：10数年来、国家は武漢地質学院に1億元に近い資金を投入して、良好な教育施設と教育環境を生み出し、多くの中年・青年教師を育て、分厚い教師有資格者の隊伍を作り出しました。北京には、多くの老練な教授と多くの教育施設があります。中国地質大学が設立されたら、北京・武漢両地が連携して教育とその環境を整えることができる、という利点を十分に生かすことができます。そのほかにも、国際的な学術交流が進めやすくなるし、大学が広大で教職員と労働者の積極性を引き出すのに役立つ、さらに多くの志ある青年を引き付け、彼等が地質事業に身を投じる上で有利に作用します。

質問：中国地質大学はどんな教育方法をとるか？

答え：中国地質大学は武漢と北京の両方に設置され、それぞれ中国地質大学(武漢)および中国地質大学(北京)と呼ばれ、両者は相互に独立した教育運営を行い、人・財・物のいずれも両者相互に独立し、教師はどちらの教育を担当してもかまいませんが、全体の教員の配置が固まれば、配置転換はできません。中国地質大学の管下に、武漢地質科学技術管理幹部学院と北京地質管理幹部学院を分設します。すべて各学院の運営が実体として、独自に処理されてきたことに対して、今後どうするかという問題はありますが、中国地質大学に属することについては、大学の名で処理し、大学で統一的に処理することにしています。

質問：中国地質大学の指導管理体制と学校規模は？

答え：中国地質大学(武漢)と中国地質大学(北京)はそれぞれ、地質鉱産部と湖北省、地質鉱産部と北京市の重複指導を受けますが、地質鉱産部の指導が主体です。国家教育委員会が幹部宛てに発した行政文書は、中国地質大学の武漢に配置された事務長を経て、北京に配置された副事務長とのホットラインによって緊密な連携をとることになります。重大な問題を処理する場合には

学長もしくは校務委員会の決定に待ちます。武漢と北京のそれぞれに中国共産党委員会を設けそれぞれ湖北省委員会と北京市委員会の指導を受けます。大学の規模は学生数を8,000人とし、そのうち武漢が5,000人、北京が3,000人（研究生、本科生、成人教育それぞれ1,000）です。大学はレベルアップと創造を主とし、教育改革の面で一つの新しい道を探り、国家が必要とする質の高い地質科学分野の人材を養成します。

質問：どうすれば中国地質大学がすばらしいものになると思うか？

答え：中国地質大学をすばらしいものにするには、何よりもまず真剣に勉強し、中国共産党の十三大精神を堅持・貫徹し、中国共産党の社会主義の初歩段階における基本路線の要求するところに照らして、顔を経済建設に向け、顔を地質調査・鉱床探査に向けながら、大学が正しい方向に前進することが必要です。重要な課題は、北京と武漢の両方の指導者と教職員・労働者が中国地質大学をすばらしいものとするために、以上の大局から出発して団結し、全体的な利点を発揮して「三面に顔を向ける」という思想を指導理念にし、水準の高い新しいタイプの地質科学の人材を養成することにあります。

そのほか、キチンと勉強する思想をさらに進め、教育の質を高くし、社会主義建設の実際の要求にふさわしい「四つの素質」をもった人材を養成して、大学教育のトップに立たねばなりません。私たちは、地質鉱産事業を熱愛し、改革精神に燃え、該博な知識を備え、近代的科学技術を身に着けた、優秀な人材を養成する必要があります。（中国地質報 1987.11.16）

この新大学の歴史と内容について、さらに詳しく説明した記事が寄せられている。その記事は次のように述べている。

昔の北京地質学院 今日の中国地質大学

「全中国の人民が中国共産党の十三大勝利を祝っている最中、理学・工学・文学・経営学を結合した一つの総合的な地質大学、すなわち中国地質大学が創立を宣言した。この大学は、世界に対し、未来に対して中国における高水準の地質専門家を養成するという重任を負っている。

歴史的な回顧

35年前、中国地質大学の前身である北京地質学院が周恩来、李富春の両氏の配慮のもと、北京大学、清華大学、唐山鉄道学院、北洋工学院、西北大学などの関係学科の参加を得て創立され、中国で最初の地質科学・地質技術の人材を専門に養成する高等専門学府となった。この

学院が当時収容した学生は1,200名で、1953年以後は年々1,000名前後の入学を迎え、1966年には教職員が1,600名に達し、今日までに17,000余名の本科生、300名近くの研究生、100名ほどの外国人留学生を送り出し、兄弟学院の専修教師、数1,000名の通信受講生を受け入れ、卒業させた。学院での科学研究も長足の進歩を遂げ、多くのテーマでの研究成果を挙げた。たとえば1956年、彭志忠氏は葡萄石の結晶構造を初めて明らかにして、国際結晶学界の注目するところとなった。そして、北京地質学院は、全国64の重点大学・学院の一つとなっていたのである。

しかし突然の嵐、10年の動乱（注一：いわゆる「文化大革命」のこと）の中で、学院はすさまじいほどの破壊を受け、教育活動を中断して武漢に移らなくてはならなかった。いわゆる「四人組」が追放されてから、とくに中国共産党第11回大会第3回中央委員会総会以後、地質学院は新たに生まれ変わることができ、武漢地質学院をそのまま継ぎ、さらに武漢地質学院北京研究生院、武漢地質科学技術管理幹部学院、北京地質幹部管理学院を相次いで創立し、そして武漢地質学院を含めたこれら4教育機関によって今日の中国地質大学が創立されたのである。

分厚い教育陣

この大学の教官は、35年前の120名から現在の1,300名へと発展した。その教育陣は正教授と副教授が400名に近く、國務院の批准を受けた学位取得者が全国の地質学院、高等地質専門学校の中でもっとも多い。現在すでに学位を持っている研究生と助手は40名ほどで、14学科の学位（ドクターの学位）が授けられ、候補学位（マスターの学位）を持っている研究生と助手はおよそ200名で、16学科の候補学位が授けられている。北京研究生院だけでも、1978年以来、学位を得た研究生が112名、候補学位を得た研究生が1,027名に及び、新たに編纂された教科書が約200編、研究生のために開設された学位課程が400コースに達している。層位、古生物、岩石、鉱物の4学科は学位取得後の研究生を招き、現在すでに4名のドクター学位取得者が研究事業への招請に応じている。

多士済々 天下に満ちる

35年の歴史の中で、中国地質大学の前身である北京地質学院以来の4学院は祖国のために合わせて20,000名の大学生、800名の研究生を世に送った。彼等は祖国の広大な大地に立って、自己にふさわしい貢献をしている。すなわち、現在100名ほどの卒業生が地質鉱産部系列の司・局クラス以上、あるいは局総工務部以上の指導に当っており、地質鉱産部系列以外では中央国家機関から各省・市の指導機関、さらに冶金、石油、石炭

鉄道 化学工業 建材 都市建設 地震 水利 電力などの行政部門 そして文化教育 体育 軍事などの部門にあって活躍している。重要な指導任務 または或る学科の学術上の先頭に立っている人も少なくない。1956年に卒業した湯立中氏は 金川ニッケル・銅・白金鉱床を発見・探査した主な地質研究者の一人である。1958年に卒業した王富洲氏は世界で初めて北壁からエベレストの登攀に成功した3名の登山家の一人であり 祖国のために榮譽をもたらした。1960年卒業の金慶民氏は女性科学者として中国の南極観測に加わり 初めて環境地球科学的な研究を行った。

教育・科学研究・生産を結合 成果は豊か

いわゆる「文化大革命」以前には 北京地質学院は多くの学問領域で科学研究活動を繰り広げ 多大な成果を挙げ その中には国家科学委員会によって重要研究成果として報告された成果が26項目にも達していた。その成果の中には 当時の国内において先進的な水準に達していたものが多く すでに国際的にも先端的な研究成果があがっていたのである。当面 中国地質大学はあらゆる地質科学の学問領域を整え 基礎科学の部門を重視し その実力が高く 厚くなるように陣容を強化し 国家と各部の多くの重点研究の課題を担うことになる。「第六次5ヶ年計画」の間に 国家が要請したテーマと地質鉱産部の重点テーマの44項目 その他の各種のテーマ84項目の調査研究は完了した。「第七次5ヶ年計画」の期間の中で 彼等は国家の重点テーマ 地質鉱産部の研究テーマ 国家自然科学基金によるテーマ 国家教育委員会博士指導基金によるテーマなど150項目を受け それらの研究に参加している。

科学研究の展開は学術的にもすでにその水準を上げ 教育の質も向上させており そのことが国家の建設に大きく貢献している。1978年以来 武漢地質学院とその北京研究生院は17テーマに対して全国科学大会賞を 4テーマに対して国家自然科学賞を 3テーマに対して国家科学技術進歩賞を 70テーマに対して地質鉱産部科学技術成果賞を 47テーマに対してその他の省・部クラス以上の科学技術成果に関する奨励賞を受けている。その大部分の表彰テーマは地質調査と鉱床探査および国家建設事業の中で顕著な経済効果を挙げ あるいは社会還元に貢献したもので 多くの成果は国際的にも矚目されている。

この数年来 教育改革を促進するため 中国地質大学は「横向連合」に努力している。大学と多くの生産機関・研究部門が人材を育て 研究を進展させ 学術を交流し 生産を拡大する面で広範な連携と協力を行いつつある。

さらに対外開放の方針と指導の下に 国際的な学術交流が大きく発展してきている。年々多数の外国の著名な学者や教授が本学を訪れて講演し 同時に本学も外国に絶えず専門家を派遣して講演 視察 研修させ 国際的な学術の会議に参加させている」

倪融 何成師 (中国地質報 1987.11.20)

学生の学習を促進し その程度を知り 個々の学生の特性を把握する一つの手段が試験である。中国地質大学では それをどのように考え どのようにして実施しているのか? そのことが判る記事にもふれてみたい。

中国地質大学(武漢) 中期試験制度を試行

「中国地質大学(武漢)は 1985年度入学の学生に対して中期試験を行い 今後各年度の学生に対してもこの種の試験を実施することを決めた。聞くところによると1985年度の77名の学生が中期試験をパスせず 大学はその不勉強ぶりに警告を与えた。

在校生に中期試験を受けさせることは 学籍を厳しく管理し 教育改革を深める一つの新しい措置である。その具体的な進め方は 学生の大学での前半2年間における德育・知育・体育の3分野について総合的に試験するというもので かつて処分された者全員と計3部門の課程の単位不足の者の追試 単位完了学生の5部門の課程の補足試験を行い いずれも試験の成績が不合格の範囲に入った学生は 引き続き後半2年間の教育を受け その2年間の勉強の中で各課目の成績が及第であり 課目の半分以上が優良であれば あるいはかつて受けた処分を明確に反省し 改めた者は本科生の資格を回復し 卒業の際にかつて不合格であった課程に対する追試が受けられ その追試に及第すれば 本科の卒業証書が交付されるが 学士の証書は交付されない。もしも上記の基準に達しなかったら 卒業時に本科の中退という手続きがとられ 卒業証書は交付されない。

地質大学は 学生が在学の前半2年間の勉強の中で各課目の試験に及第し しかも55%の課目の成績が優であり そして中期試験の成績も優であれば 中期試験優秀証が渡され 榮譽称号が与えられると規定している。

楊明 (中国地質報 1987.12.21)

日本の大学では一般に 試験が年2回 大学によっては年3回実施され 地質科学分野では特に実習の単位取得が重視されている。筆者がかつて紹介した「北京大学地質学系のカリキュラム」(本誌 第379号 p.36—49 1986) で明らかのように 少なくとも北京大学では1課程が半年で習得されなくてはならないという 日本では実施されていない「詰め込み」教育がされている。筆

者は「急ぐのもほどほどに」と考える者であるが、どこでもお国ぶりということがあろう。それにしても厳しい。学生の懸命な勉強の様子が想像できる話である。

一方、学生生活は勉強だけで成り立ってはいない。まさに中国の高等教育の責任者たちが言っている「知育・徳育・体育」のバランスはとらねばなるまい。日常の学園生活に潤いも必要ははず。そのようなことに係わる報道を紹介する。

新しい食堂管理方式

「6月1日 中国地質大学の食膳科と教務課は食堂の管理を改善する協定に署名した。この協定は、毎日食堂の「客に接する態度、御飯とお菜の質と量、評定による奨励」の三位一体の審査制度を実施するというもので、すでに客に接する態度や御飯とお菜の質と量は良くなっている。

この大学では、食堂で食事をする学生、職員、教員が毎日2,600人に達しており、食堂の運営や管理の善し悪しは学生・職員・教員の切実な損得に直接影響する。食堂のサービスの質を向上させるため、今年5月15日、食膳科は商店の店員の礼儀・作法を導入・教育し、第一食堂と第二食堂では炊事担当者が名札を掛け、さらにその日の鍋物、炒め物、蒸し饅頭、焼き餅を作る炊事担当者はそれぞれの担当者名と担当料理名を黒板に書き出して、食事に来た学生たちに点数をつけてもらっている。その効果は抜群である。

名札を胸に付けて働くことを基本にして、彼等は基本賞と審査賞という二つの表彰制度を作り、勤務に対する責任感が強く、衛生に心掛け、料理の種類が多く、その質が高く、勤務態度が優れている炊事担当者は評価され賞を受けるのである。同時に、食膳科と教務課は協議して、毎月主食は30品種より少なくはならず、お菜は100品種より少なくはならない、という協定を結んだ。この一連の規定と表彰制度は炊事担当者の勤務態度の改善を促進し、主食とお菜の質を高め、量を増やし、炊事担当者の絶えまない主食とお菜の種類に変化をつける努力を鼓舞し、学生・職員・教員たちの歓迎を受けている。 呂道寧 宋文海（中国地質報 1987. 6. 22）

中国地質大学（武漢）に全国体育先進機関の称号

「第6回全国スポーツ大会で中国地質大学（武漢）は全国体育先進校スポーツ競争の成績が非常に良く、国家体育委員会は1987年、これに「全国体育先進機関」の称号

を与えた。この数年来、中国地質大学（武漢）は体育に対して一連の改革を行い、4水準の体育課程を開設し、教育の質を不断に高めることに努めた。その結果、学生の体力は1985年の全国大学体力・健康抽出調査の結果と比較して、それぞれの指標が全国の同じ年齢の学生よりもすべて高くなった。在校生の標準到達率は長年にわたって90%以上を維持しており、湖北省では最高クラスに入っている。

大衆的な体育活動を展開することを基礎にして、同校は陸上競技、登山、バレーボールなどのレベルが高いスポーツ班を組織し、1987年に国家教育委員会によって全国高等教育機関高レベルスポーツ班モデル校の一つとすることが承認された。同校の陸上競技班とバスケットボール班は湖北省の学生代表として第1回および第2回全国大学競技大会に参加し、優勝の栄冠を得た。

この数年の登山活動では、同校がまた新記録を立て、中国代表登山隊に3名の優秀な隊員を送りこみ、そして彼等は1988年の日・中・ネパール合同エベレスト登山隊に加わった。また、昨年11月29日、同校は日本の神戸大学山岳部との間で登山・科学調査友好協力合意書に正式に署名し、1988年にまず四川省内の雀児山脈の主峰に合同登攀することとなった。これは、日中両国の学生間の友好と交流であるだけでなく、高等教育機関における体育分野に国際交流と協力の先例を創ることでもある。

中国地質大学（武漢）の体育は一定の成果を挙げたが、その主な原因は不断に経験をまとめ、分析し、効果的な科学的体育管理制度を模索し、専門的な地質教育と結び付けてさまざまな体育活動を展開し、それぞれの分野の積極性を引き出したことにある。

胡蕪生（中国地質報 1988. 1. 11）

大学生千人 喻家山に登る

「中国地質大学（武漢）の今年の登山競争は、最近武漢市の喻家山で行われ、その競争におよそ1,000人が参加した。

登山競争は、中国地質大学（武漢）の昔からの伝統である。同校は1958年に登山班を創設し、1984年にそれが国家登山協会の承認を得て登山協会の設立となった。登山班創設以来30年この方、同校は6,000人を骨幹とする大衆登山運動を育て、中国代表登山隊に13名の優秀な登山家を送り込んだ。今年10月、北京で行われた第1回中国ロッククライミング競争で、同校の青年教員である張寧と在校生の姚多録がそれぞれ第2位、第3位になった。

同校の登山運動の普及とその高まりは、卒業生が登山

技術を学んで絶壁 高山 深谷での地質 地形 氷河 測量 気象などの学問領域における科学的考察の仕事を全うする上で大いに役立っている。中国地質大学（武漢）は大衆的な体育活動を重視し 展開したことによって 本年 国家体育委員会から体育先進機関と体育文化機関の名を与えられた」。

韓亜卿（中国地質報 1987.12.28）

以下 大学事情の一端を報道した記事を集めて紹介する。

人事制度の改革の動き

「中国地質大学（武漢）の傅金宝ら3名の教員は 先日揃って大学の服务公司で働く協定にサインし 1月1日からそれぞれ施設補修工場と兼職することとなったが 協定の期間は5年である」。

呉勝雄（中国地質報 1988.1.22）

中国地質大学（武漢）地球科学特別班 開かれて2年

「地質鉱物系でもっとも早く5年制の“双学士学位” 試行組織が 創設されたのは中国地質大学（武漢）で 同大学で地球科学特別班が開講されてから2年 その成果には喜ぶべきものがある。同班全員29名がコースを継続し 各分野で優れた成績を挙げ 一部の学生はすでに第2ドクターコースを修め始めている。

1985年9月 もとの武漢地質学院は一步進めて高等地質教育の改革の方向と優秀な人材の育成の道を求め 新入生全員1,104名から30名の優秀な学生を選抜して地球科学特別班を組織した。班が組織されてから2年 同学院は班の学生の資質が優れ 基礎知識がしっかりしていて スタンドポイントが高く 理解力が大きいことを根拠に 「基礎学力を強化し 専門分野を広げ 能力の啓発を重視する」方針に照らして 幾つかの特別な措置を構じた。

まず“4大基礎教育” すなわち自然科学の基礎（数学・物理学・化学） 英語の基礎 コンピュータの基礎 地質学の基礎の教育を強化し たとえば普通班に比べて自然科学の基礎課程を180単位 英語の基礎課程を90単位多くして 英読 会話 漢訳 英訳の訓練を強め 卒業時にはマスター研究生の英語の水準に達していることと規定している。

次いで特別な措置をとったのは 優秀な人材を育てるための次のような条件づくりである。

……“双学士学位”制と2指導教官制を実施する。

1989年1月号

特別班の学生は5年間に地質学と別の工学分野のそれぞれ学士学位課程を修め 大学は各学生に2名の教官を配置し それぞれ理学と工学の学位論文作製の指導に当る。

……教育経験が豊かな 教育効果が大きい教官（外国人教官も含めて）をその教育に当て 開講する。教育内容の編成 講義と実習は全て普通班の方式を取らず 主として思考を啓発する方式を採用する。

……地質鉱物系主管部門の管轄下での責任制を実行する。

……学生の理解能力を調査し 教育計画の合理性を検証し 調査結果にもとづいて 教育計画を適宜調整する。

……活力を高め 管理は厳しくする。特別班は2年クラスから開始し 自由に聴講し 高学年の選択・必修課目の単位制を実施し 本科段階の選択・必修マスターコースで取るべき単位は10単位とし “優合格劣落第”の選別制度を実施する。特別班を組織して以来 10名の学生が特別班に不適格を理由に普通班にもどされ 同時に1985年入学生から9名が選ばれて特別班に補充された。特別班には奨学金制度が導入され 優秀学生賞 特等生賞などの制度も創設された。

人材を選び 才能を育てる方法が当を得ていたことによって 班を組織してから2年このかた 地球科学実験班の学生は各分野で優秀さを表している。勉強の成績は普通班の学生に較べていちじるしく優れ この2年来の全学数学・物理学・英語競争に参加して19名が表彰を受け そのうちの4人は一等賞を得た。そのほか この競争での団体賞も受け 身体・素質とも明らかに高水準にあり 体育課程では第一学期での成績がたった一人良であったのが 第二学期には19人が優になったのである。班全体で20人が大学の勤労・学問検証運動に参加し あるいは家庭教師活動にしたがっている。

少し前 大学の工学系の系責任者がこの特別班を訪れて 工学系の専門分野の紹介を行った。全班29名の学友たちは 全員が進んで第二学位の修学分野を選んだ」。

張桂珍 梁志 楊明（中国地質報 1988.1.29）

最後に 中国地質大学（武漢）の前身である武漢地質学院の卒業生たちの僻地進出の模様を伝える報道を掲げて この一小文を終わりたい。

武漢地質学院卒業生 新疆で奮闘

「1981年以来 前後300名余の地質学科卒業生が各地の要請にしたがって新疆ウィーグル族自治区に赴任し 辺境地域の地質事業の繁栄のために 新疆ウィーグル族自

治区の経済の発展のために 青春と知恵を捧げている。

1984年 武漢地質学院を卒業した劉衛東と彼のガールフレンド何王基は新疆ウィーグル族自治区地質鉱産局に到着するや 進んで水理地質隊への参加を申し出た。暫くして 何王基は高地で寒冷なアルタイ地域に派遣され 劉衛東も毅然として出向いて行った。それからまた彼等は肩を並べて瑪納斯河の流域で野外測量に従事した。この間 彼等は互いに励まし合い 落後に甘んぜず 優秀な成績を挙げ 去年は“為辺陞優秀儿女挂獎賞”活動で彼等はそれぞれ銀賞と銅賞を受けた。1983年に武漢地質学院石炭地質学科を卒業した範子文は 自ら進んで新疆ウィーグル族自治区での勤務を願いでた。

2年の間 彼は野外で自然に翻弄されながら炭田調査に苦闘を続けた。一炭田区域の炭層の堆積現象の特徴を明らかにするために 彼はしばしば単独で山に登り 詳細な地質と地質断面を調査し 柱状地質断面図を組立て 調査地の挟炭層の堆積環境を研究するために大量の資試料を集めた。炭田区域での探査 石炭試料とガスの採取は苦難の事業であった。いつもいつも昼夜を分かない試錐現場での観測では 彼は終夜班勤務を希望し 適えられて徹宵の仕事を続けた。去年 新疆ウィーグル族自治区地質鉱産局は彼に“新長征突撃手”の称号を贈った。

劉二虎 (中国地質報 1986. 7. 14)

おわり

(新著紹介) A. KEZDI L. RETHAI : Handbook of Soil Mechanics 3 Elsevier, 1988. 361p., Dfl. 240

釜 井 俊 孝 (環境地質部)

Toshitaka KAMAI

本書は全4巻で構成される土質力学ハンドブックシリーズの第3巻で “German Handbuch der Bodenmechanik Band 2” の英訳増補改訂版である。著者らはハンガリーの研究者であり このシリーズにより東欧圏における土質力学の状況を伺い知ることができよう。

第1巻と第2巻はすでに刊行されており 第1巻は土の起源 分類 応力・ひずみ 透水 変形 土圧などの基礎的性質 第2巻は調査や試験法など物性の決定に関する内容となっている。一方 本書では土工 基礎 地盤改良などが中心に扱われ 第4巻に含まれる予定の地すべり ダムなどの分野と合わせて 土質力学の工学的側面をカバーしている。本書は6章で構成される。

“第1章土工に関する力学”では盛土 切り土に関する安定問題とフィルダムの透水を中心として記述されている。前者では限界平衡法による安定解析が様々なケース毎に述べられているため 技術者は問題に適した解法を容易に選ぶことができる。また 環境の変化や時間の経過による影響についても多くのページが割かれており 本書の特徴の一つとなっている。“第2章 支持力と浅い基礎”と“第3章 支持力とくい基礎”では支持

力と基礎に関する理論が取り扱われており かなり詳しい解析が述べられている。しかし一方で ケーソン基礎についての記述が見られない点については 奇異な感じを否めない。“第4章 道路”では 道路施工に関する話題がルート選定から路床・舗装の設計に至るまでまとめて扱われている。ここでは凍結による被害の防止についても詳しく述べられており 気候風土の違いを感じさせる内容である。“第5章 土の物性の改良”では 締固め 深層混合処理 補強土などの地盤改良法が述べられている。“第6章 動的性質”では動土質力学の理論が述べられている。東欧と我が国とは地震の発生頻度が異なるので 具体例がほとんど述べられていないのは止むをえないことかも知れない。

全体として 限界平衡法や支持力理論など いわゆる“古典的”な分野についてはほぼ完璧に網羅した内容であり 良質なハンドブックと言える。しかし欲を言えば最近発展がめざましい数値解析の応用分野についてももう少し触れるべきだった様に思う。これも国情の違いによるものだろうか。